



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

復活の主日A年（2026年4月12日）

主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 2 章 4 2 – 4 7 節

第二朗読：ペトロの手紙 1 1 章 3 – 9 節

福音朗読：ヨハネによる福音書 20 章 1 9 – 3 1 節

見る、信じる

『ヨハネによる福音書』では、「見る」と「信じる」という動詞が一組になって登場することがあります（2 章 2 3 節、4 章 4 8 節、6 章 3 0 節、3 6 節、4 0 節、2 0 章 8 節、2 5 節、2 9 節 a、2 9 節 b）。そのうちイエスさまがなされた「しるし」を見て人々が信じた例は次の通りです。

イエスは過越祭の間エルサレムにおられたが、そのなされたしるしを見て、多くの人
がイエスの名を信じた（2 章 2 3 節）。

イエスは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言われた（4 章 4 8 節）。

そこで、彼らは言った。「それでは、わたしたちが見てあなたを信じるができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか（6 章 3 0 節）。

そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」（2 0 章 2 5 節）

最後の箇所は今日の福音朗読の部分です。先週の福音の箇所では「イエスが愛しておられたもう一人の弟子」（2 0 章 2 節）は、何を見て信じたかがハッキリとしません。ただ、「それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた」（2 0 章 8 節）とあるだけです。なにかの「しるし」を見たわけではありません。この弟子は（弟子の理想像を表す架

空の人物であったかもしれませんが）、今日の福音朗読にある「見ないのに信じる人は、幸いである」（29節）を先取りしていたのかもしれませんが。

29節の「見ないのに信じる人たちは幸い」を味わいたいものです。

トマスは他の弟子たちが復活したイエスさまに会って体験したことを聞いても信じませんでした。「わたしたちは主を見た」（25節）という証言の「ことば」に耳を貸そうとしなかったのです。実際に見ること、触れることを望みました。

しかし、見ることの空しさはイエスさま自身がお存じだったようです。「イエスは過越祭の間エルサレムにおられたが、そのなさったしるしを見て、多くの人がイエスの名を信じた。しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった」（2章23－24節、4章48節参照）。とあるからです。

その一方で福音書の中には「ことば」によって信じる人々も描かれています。サマリアの女（4章41節参照）、息子が癒えると信じて帰っていった役人（4章50節参照）などがその例でしょう。肉眼でイエスさまを見えなくとも、弟子たちの証言の「ことば」によって信じていくようになる。つまり、見る人から「ことば」を聞く人へと変わっていくのが「幸い」なのです。